

# 思いやり行動を促す役割取得能力の育成

— 役割取得の必要感に着目して —

○西村優希<sup>#1</sup>・石野陽子<sup>#2</sup>

(<sup>#1</sup> 島根大学教育学部学校教育課程・<sup>#2</sup> 島根大学教育学部)

## 目 的

役割取得能力とは「自他の観点の違いを意識し、他者の観点到立つことにより、他者の欲求・意図・信念・感情・知覚などの内的特性を推論する能力」を指す(木下, 1977)。本研究は児童の思いやり行動を促す要素の1つとして、その能力の育成を目的としている。そして、Flavell(1974)が示す役割取得の動機づけともいえる“Need(必要)”に当たる思い(以降、必要感と称する)に着目している。その必要感を児童に気付かせることが能力育成に効果を及ぼすのかを検討していく。

## 方 法

**実験対象者** 島根県内の公立小学校第4学年66名(3クラス、男子27名、女子39名)

**実験方法** 対照実験による。渡辺(2001)による役割取得能力評定質問紙を6件法に改良したプレテスト(配布部数75部、回収部数69部(92%))の分散分析では3クラス間で有意差はなかった。そこで、クラスを3群(クラス1(男子9名、女子11名):実験群、クラス2(男子8名、女子14名):統制群、クラス3(男子10名、女子14名):未受講群)に分け、クラス1と2に授業実践を行った。扱う必要感については、同学校及び鳥取県内の公立小学校第6学年を対象に筆者が行った予備調査の分類より3種選定した。

**実験時期** 2023年9月上旬-10月下旬(うち、実験的授業実践は2023年10月17日(火)1校時、2023年10月18日(水)2校時に実施)

**実験内容** ①統制条件:渡辺(2001)のVLFプログラム、②扱う必要感:他者への心理的傷害回避(例:傷つけたくないから)・状況悪化回避(例:けんかになりたくないから)・自他尊重(例:自分も意見を主張して、相手の意見も聞いて見直すため)、③実験群介入:VLFプログラムの「活動」(着目する必要感の条件を変えた役割演技)と「表現」(必要感を価値付けた上での主人公への助言を書く表現活動)

## 結 果 と 考 察

各群間のポストテストの役割取得能力評定平均得点の $t$ 検定結果をTABLE1に示す。

TABLE 1 各群間のポストテストの役割取得能力評定平均差の $t$ 検定

	対人理解	葛藤解決	役割取得	全体
実験群-統制群	.49	.07*	.86	.29
統制群-未受講群	.21	.61	.20	.84
未受講群-実験群	.56	.27	.29	.29

\*\* :  $p < .01$  \* :  $p < .05$  + :  $p < .10$

実験群と統制群に葛藤解決の因子にやや有意差が認められた。葛藤解決の因子は、意見の対立や不道徳的な場面での葛藤の中で一番ふさわしいと思う行動を選択する設問である。得点が高い選択肢では、別の提案をしないし他者理解のため理由を求めるなど、状況を客観視して他者を考慮した行動になる。必要感に着目することで葛藤部分をより意識させ、主人公の立場に立つのと同時に友達の立場も深く考えさせる状況を生んだことが葛藤解決の因子の有意差につながった可能性はある。それが一部の児童の「表現」の活動で自分と他者を同時に考慮する思いの記述や別の提案をする記述としても表れている。しかし、全体としての有意差は見られず、また各群のプレテストとポストテストでの有意差は見られなかった。VLFプログラムの実践は数多くあり、渡辺(2003)の実践でも2ヶ月にわたる6時数の授業で対象実験を行ったが役割取得能力の有意な差は見られなかった。より長期的な授業実践の中で能力育成を目指す必要はあるが、逆に1時数で有意差が見られたという点は必要感というものの有効性に一考の余地があることが示唆される。

## 引 用 文 献

- Flavell, J. H. (1974) The development of inference about others. In Mischel T. (ed) Understanding other persons. Basil: Blackwell, 66-116
- 木下芳子(1977) 役割取得能力の発達 児童心理金子書房, 31, 187-208
- 渡辺弥生(編)(2001) VLFによる思いやり育成プログラム 図書文化社
- 渡辺弥生・坂田雅則(2003) 思いやりの心を育てる道徳指導法の工夫—VLF(Voices of Love and Freedom)の有効性の検討— 日本教育心理学会総会発表論文集, 606